

受験番号
氏名

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「はてしなく」といった気分で老齢の家族の介護をしていると、こちらが世話をしているのか、相手の奴隷になっているのか、よくわからなくなることもある。相手の言いなりになっているという想いがつり、からだの芯に疲れが溜まってきて、我慢できなくなり、つい、「そう勝手ばかり言わんと」、「他にもしんならんことあるんやから……」と、溜まりに溜まったものをぶつけてしまう。

看護関係の本をばらばらめくっていると、よく、看護のなかで「ケアする者がケアされる」という表現に出会う。「癒す者が癒される」という言い方もある。他人を介護するときには、こういう気分になることもないではない。じぶんの時間を相手にあずけて、そのひとつぶやきに身をまかせているうちに、ある一つのいのちの胎動に、あるいはそれが潜りぬけてきた時間の重みにふれて、ふと身がほどけ、じぶんでも気づいてこなかったじぶんのいのちのつぶやきにも耳を澄ますことができるようになる。

しかし、じぶんの親のことになると、言葉を交わすうちに気持ちがおこれてきて、言わないでもいいことをつい口にしてしまう。一言一言が他人をも巻き込んでもつれにもつれた関係を暗示してしまい、ふと口から漏れた不用意な言葉が、いまの想い以上の意味を否応なくもってしまい、相手にきつく突き刺さり、なにげない言葉のやりとりにもどどどと疲れてしまうなどということもめずらしくない。

病院の看護師さんにしてもそうだろう。関係は看護するひと／されるひとと単純なようにみえるが、業務ででてこまいのときにコールがなりやまなかったり、隙間をぬって患者のベッドに駆けつけたときにサービスしてもらって当たり前だという顔をされたりすると、相手を呪いたくなる。それをも笑顔でかわさなければならぬ身を恨みたくなる。が、そう思ってしまうじぶんに強い後ろめたさを感じて、こんどは身を責める。そうして距離の取り方じたいがよく分らなくなって、ケアという仕事に疲れ切る。

「サービス」という言葉がある。業務一般（兵役もふくむ）や公益事業からもてなしや接客まで、広い意味で使われ、日本語としてもサービス業やサービス・ルーム、ケア・サービスといった言い方ですでに定着している。

「サービス」はもともと、仕える・奉仕する・勤める・奴隷であるといった意味のラテン語の動詞に由来する語で、サーバント（召使）やサービリティ（奴隷状態）、コンピュータやバレーボールのサーバーも同じ語源から派生している。この言葉にもはじめから、世話をするという意味と奴隷になるという意味が裏表になってふくまれていたのだ。

ところがこれにはもうひとつ、がつんとやられるような究めつけの話がある。「サービス」のもとになる「サーブ」の語源は、さらになんと、サンスクリット語（古代インドの言語）の「セーヴァ」にまで遡れるという。これが中国にわたり「セワ」という音になり、それに日本語で「世話」という漢字が充てられたというのだ。「サービス」はもともと「世話」と直結していたのだ。

ひとはたしかに独りでは生きていけない。生まれ落ちてでも独りでは飲み食いすらできないし、死期が近づいても独りで棺桶に入ることできない。ひとは支えあいながらしか生きていけない。だが、その支えあいというものがとにかくむずかしい。支えられるということもたれるということの違いを知るのがとくにむずかしい。

もたれあわない支えあいというものを求めて、独りもがき苦しんでいるひとがこの世には存外多いのではないか。

（鷲田清一「もたれあうのではなく」による）

問一 傍線部に「もうひとつ、がつんとやられるような」とあるが、筆者はなぜそのように感じたのか。理由を一〇〇字以内で述べよ。（句読点も一字に数える）

問二 右の文章について、筆者の看護に対する考え方をまとめたうえで、それに対するあなたの意見・感想を述べよ。（四百字以上五百字以内）（句読点も一字に数える）